



【秋田県五城目町大川】

文= 成影 沙紀、高橋 博之 写真= 玉利 康延

車両通行止めの看板を過ぎると、商店街の道の両側に小さなテントがポツリポツリと立ち並んでいる。ひっくり返したビールケースの上にベニヤ板を乗せて、スーパーでは見かけない山菜の束や、小魚の佃煮、名前もわからぬ漬物が並べてある。祭りの屋台群を通り抜ける時のように、呼び込みを振り払わなければならないと思っていたが、店の人はみんな控えめに会釈する程度で、驚くほどあっさり朝市通りを通り抜けてしまった。

秋田県五城目町。毎月2、5、7、0のつく日にこうして開かれる朝市は、520年以上もの間、連続と続いてきた営みだ。朝市通りの中頃で面白いものを見つけた。ラズベリービール、「RAZMAN（ラズマン）」。黒とピンクの洒落たデザインが目を引く。店の奥では小学生くらい女の子が退屈そうに足をぶらぶらとさせている。「ラズベリーを使った黒ビールなんです」と店主が話しかけてきた。この人が今回の主人公、ラズベリー農家であり、ラズベリービールの開発者でもある鈴木矩彦（のりひこ）さん（46）だ。

五城目のラズベリー栽培

秋田県は国内のラズベリー生産量が北海道に次いで2番目に多く、その中でもここ、五城目町は秋田県産のうち約70%を生産する。この理由は10年前にさかのぼる。秋田県の主要農作物は米だが、減反政策により米以外の収入源を生み出す必要があっ

た。新しい需要が見込め、かつ米と繁忙期が重ならない作物として秋田県立大学ではラズベリーが研究されていたのだ。モデル地域として五城目町が手を挙げ、2008年に生産が始まった。以来、「五城目キイチゴ研究会」という生産者組合を組織し、日本では定着していないラズベリーの生産技術を研究してきた。さらに、「五城目キイチゴ販売会」では販売を行う20人ほどの生産者がグループになり、県内外の製菓店やレストランに営業し、販路拡大を図ってきた。鈴木さんも両会に所属している。

教師一家

鈴木さんは五城目に隣接する、秋田県潟上市出身だ。両親ともに教師、さらに祖父も教師という教師一家に生まれ育った。田舎では「教師なんて何も知らない世間知らずだ」と揶揄されることが少なくない。幼い頃、祖母が田んぼに行くのを見て、農業に興味を持ったこともあるが、その祖母から「農家は(食えないから)やるな」と言われて育った。大学進学時も当時出始めたパソコンに興味を持ち、工業大学に進学を希望するも、長男として親の期待に沿うべく地元の大学に進学し教員免許を取得、五城目第一中学校で教師人生をスタートさせる。

幼少期からピアノを習っていた鈴木さんは、音楽の先生になった。人生の先輩として子どもたちに教える立場ではあったが、全く自信を持ってない日々が続いたという。「教師一家に生まれ育って、自分は教師の世界し

知らなかったんです。いろんなバックグラウンドがある子どもたちがいるのに、俺が知ってる世界は狭くて、教師として至らない人間だという自覚がずっとありました」。不安な状態で定年まで働くのが耐えられず、自分も子どもたちも不幸にしてしまうという思いは次第に強くなっていった。

26歳、上京

4年間教鞭を執った鈴木先生は、突然教師をやめて上京する。自分が知らない世界を知りたいと東京に飛び出し、1年間英会話とWebの専門学校に通い、設立直後のWeb制作会社に就職する。そこはこれまでとは全く異なる、右も左も分からぬビジネスの世界だった。社長からは「この教師上がりが！何にもわかってねえくせに！」と怒鳴られた。その言葉は鈴木さんがずっと抱えていた教師コンプレックスを再び強く刺激した。

会社に泊り込みで仕事をするような厳しい働き方に加えて、容赦ない上司からの罵声に鈴木さんの心はすり減っていた。マンションの屋上に上がり、下を覗き込むほど追い詰められたこともあった。その後、いくつかWeb関係の会社を転職し、ヤフー株式会社に入社する。世間からは羨まれる大手IT企業だが、それでも彼はコンプレックスに縛られていた。「周りの人は確かに凄かったんですが、俺はヤフーの中では全然できない方でした」。